

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力（5） プロ技の教材を協力隊員に

国際協力事業団（現、国際協力機構）インドネシア森林火災早期発見・予防プロジェクトの専門家から、プロジェクトで森林火災予防や森林の大切さを教えるために作成した教材がジャカルタ新聞（インドネシアで発行されている日本語の新聞）で紹介されたという連絡をもらいました。そのしばらく前に、ジャワ島にある国立公園で環境教育をしている青年海外協力隊員から、新しい教材が無いという話を聞いていたので、「これだ。」と思いました。

「スマトラの学校向けのテキストですから、ジャワでそのまま使えるかどうか分からない。テキストを渡すだけでなく、内容について説明した方が良いと思う。」と言う専門家と、現場に入っていてなかなか連絡が付かない隊員との間でテキストの受け渡しが実現したのは、連絡を受けてから1月後のことでした。隊員は教育用テキストを手に入れ、プロジェクトは成果普及の担い手ができるため、さしたる努力もなしに両方から感謝されることができました。

情報はありあまるほど流れているのに、情報発信者と情報受信者のニーズが一致することはあまり無いような気がします。誰がどんな情報をもっているか、誰がどんな情報を必要としているか、情報流通の仲立ちをするだけで、国際協力を効率的に進めることができるようになるのです。情報の仲立ちをするためには、仕事の上での成果や問題を忌憚無く話せる関係が必要です。それなしには最新の情報は手に入りませんし、また自分が提供する情報を信じてもらうこともできないのです。で、どうしてこの話が「嫌われても国際協力」になるかという、たまたまうまくいった話をもっともらしく書いた単なる自慢話だからです。でも、結構、いい話だったでしょう？ 私だって人の子、嫌われるのは好きじゃない。それに本当に嫌われてしまったら、仕事にならないですから。

（藤間 剛）

編集係注：本文にある学校向けテキストについては、森崎 信：インドネシア政府による持続的な啓蒙普及活動（本誌 60 号 70 ページ）に詳細に報告されています。